

六甲カトリック教会 教会報

5

No.581



小教区評議会議長の指名を受けて

鍵山 浩三



この度、2020年度の小教区評議会議長を拝命致しました鍵山浩三です。私が六甲教会に初めて参りましたのは、当時の主任司祭でいらっしゃったブラウン神父様から洗礼を受けて頂いた、生まれて2か月後の1956年10月のことでした。もちろん記憶にはありませんが…。

その後、小百合児童館、高羽小学校、六甲中学校・高等学校という、六甲教会の「地元」の幼稚園・学校に通って学生時代を過ごしたのですが、その間、教会で行われる様々な行事に参加することによって、多くの素晴らしい先輩や後輩たちと出会うことができ、現在につながる貴重な経験の機会を与えて頂いたと感じています。

小学校時代は、毎週土曜日に「こじかクラブ」（現在の教会学校）で、大学生のリーダーから楽しいゲームや歌を教わったり、山登りやスポーツで汗を流したりし、日曜日の「侍者の練習」の時間には、神父様からミサで使うラテン語や、祭壇での侍者の奉仕の仕方、聖具・祭服の扱い方などを教えて頂きました。

その後も、高校生会の副会長として夏のキャンプや春の錬成会を計画したり、聖土曜日のろうそくやイースターエッグを準備したりしたこと、クリスマスの深夜ミサのあとに焚火を囲んでココアを飲みながら歌を歌い、みんなで教会に泊まって25日の朝のミサに出たことなどは忘れられない思い出です。

さらに大学生になって高校生会のお手伝いをさせて頂くことになったのですが、日々成長していく彼らとともに共有した時間や体験から学ばせてもらったことは数え切れません。

六甲教会を取り巻く環境は、当時と今とでは随分様変わりしてしまいましたが、自分の人生において、この教会を通して得させて頂いたものの大きさを実感している私個人としましては、この六甲教会が、一人でも多くの方にとって、私と同じような思いを持たれる場として今後もあり続けることができますよう、微力ながらお手伝いさせて頂ければと考えております。

これまで誰も経験したことがなく、先の見えない不安な状況下でスタートした2020年度ですが、アルフレッド神父様、中村神父様をはじめ、信徒の皆様のお一人おひとりのお力添えを頂いて努めていこうと思っておりますので、どうかよろしくお願い致します。

おことわり

2020年5月2日（土）に印刷する予定であった教会報「5月号」はホームページ版のみ発行します。紙面での発行は原則行いません。コロナウィルス感染予防の自粛要請による判断です。ご了承下さい。（広報部）

ついに前代未聞の聖週間公開ミサは中止という事態になりました。辛うじて開かれた各司教区でのオンラインミサ中継を御覧になった方も多いと思います。以下画面で与った信徒の記録です。

4月5日 枝の主日

今年の枝の主日は、特別な日だった。いろいろな意味で《特別な日》という表現しか思いつかない。新型コロナウイルスに起因する外出自粛が叫ばれる中、教会のミサさえも、《非公開》を余儀なくされた。この復活節という時期に、ミサに与れない…そんな事態は想像すら困難だったが、自然の怖さの前にはなすすべもない。

とは言っても、この現代において、新たな発見も多い。逡巡した挙句、パパさまのミサに与ることを決めた。もちろん、動画を通して、ではあるが。荘厳なサンピエトロ大聖堂での映像において、細かい装飾の施された高い天井も、動画なら間近に見ることができる。そこかしこに枝が飾られているが、枝を手喜び迎える日というより、これから始まる受難の一週間のための厳かな心の準備だと感じた。静かに祈るパパさまに勇気もらい、今まで当たり前感じていた平穏な日常に感謝すると共に、今、そして、これからの日々をいかに過ごすか？迷うばかりの毎日ではあっても、今はただ、神様の御心のままに。《望》

4月10日 主の受難の典礼



「聖金曜日」4月10日大阪カテドラルで前田万葉大司教による「主の受難の典礼」が執り行われた。大司教が十字架の前に跪いて祈りをささげた後、「ヨハネ福音書」のイエスの受難と死の場面が朗読され、説教は酒井補佐司教によって行われた。

「世界には苦しみが満ちているが、本当につらい苦しみは心の痛み、不安、恐れである。イエスには不安、恐れはなかった。この世の死は永遠の命への入り口であり自分の苦しみは全人類を救うからである。本当に恐ろしい苦しみは、死後終わりのない永遠の苦しみである。そして今、苦しみを味わっているから苦しんでいる人々を理解する事ができる。今回、8割行動を制限する事は、苦しんでいる人々の所へ行って寄り添う事ではなく、減らした8割をメール、手紙、電話、祈りで寄り添う事だ。自分自身が不安で苦しい時は十字架上のイエスの側にいた人の様に、寄り添う事で自分の苦しみは減るのです」と、語られた。

儀式の後半、十字架の崇敬では、祭壇前に十字架が運ばれ司教は覆いをとられた十字架に祈りをささげられた。動画で見る典礼は鮮明で字幕も出た為、理解しやすい箇所もあり思いの外、深く典礼を味わえた。「動画で与った典礼もあったね」と、言える日が早く来るようにお祈りします。《藤》

4月12日 ご復活の主日ミサ



本年のご復活ミサは生涯のうち最初で最後の経験となることでしょう。限られた空間で(密閉)、多くの信徒が集まって(密集)、共に祈り歌う(密接)、いわゆる3密から遠ざかるよう、政府や自治体から強く要請されました。暫くの一私たちにとっては長い一問、教会でごミサに与ることができなくなりました。

そのため大阪教区では司祭と修道者だけでごミサをとり行い、その様子はYouTubeでアップされました。聖木曜日から復活の聖なる徹夜祭の土曜日までライブ配信され、録画は誰でもいつでも見ることができます。ところがどういわけか、日曜日の復活の主日ミサは配信がありませんでした。録画もされなかったようです。何らかのマシントラブルがあったのではないのでしょうか。慌てて他のチャンネルを探しました。東京の聖イグナチオ教会では、9時からのごミサが配信されていました。

私は広島司教区のライブ配信で共に祈ることができました。こちらでは一般の信徒もごミサに与りご聖体を拝領されたようでした。ただし翌日4月13日(月)から30日(木)までのごミサは、動画配信だけになるとのことでした。広島教区の信徒たちと一緒に(動画とはいえ)ごミサに与り、霊的聖体拝領までできました。このような形でご復活を共に祝えたことは、格別の思いがありました。

YouTuberには、各地のごミサの様子が今後も配信されるので、いつでも共に祈ることができます。

とは言うもののリアルに六甲教会で皆が一堂に会し、主を賛美することが、どれだけ平和で有難いか、身に染みて感じました。この厳しい現状が一日も早く収まるようにと、今もいつも、みな心が一つになって神に祈っていることだろうと、私は思っています。《阪》

桜は見事に満開したこの4月の初め、緊急事態宣言が発表され、キリスト者も教会も全く前例のない体験をしている。無人の聖堂にはただ沈黙が支配し、木製の大きな十字架が独り立つばかり。私はつくづく「地球が巡りゆく限り、いつも十字架が立っている」という言葉を実感した。

陽気に誘われてなのか、二年間を過ごした前任地・三篠教会の聖堂前の桜や、天満川沿いを懐かしく思い巡らした。歳歳年年、人同じからず。来年の桜花を何処でどんな心で、眺めているのか知らないが、すべてを神のみ旨にお任せするばかり。全世界は目下、花見どころか新型コロナウイルスの脅威に襲われ、日々の感染者と死者の増大に怯えおののくばかり。企業活動は制限され、物流は滞り、デパートや飲食店には閉古鳥が鳴き、多くの商店は顧客がないまま休業し、すべての教育機関は大学も含めて休学し立ち入りさえ禁止されている。損失の大きさ災禍の重さは測りきれない。さらにこの異常事態がいつまで続くのか、どうすれば良いのか、先行きは不明のままただ恐れるばかり。しかしながら、神か仏を信じている人は、同じ不安と心配と恐怖の中でも、何か何処かで違っているのではあるまいか。

しかし今や新たに気づくのは、愚痴と不平をこぼし苦労もあった何でもないアタリマエの日常生活が光り輝いてくる。嫌な疲れ仕事や務め、試験や授業に追われ縛られた学校生活、単調なくたびれ儲けのアルバイト、いやいや参加していた教会の典礼や

集まり、煩わしい人間関係や雑多な騒がしい人々の参集などなど。今から見るとどれほど贅沢な悩み苦しみ、どれほど有り難いものだったのかが分かる。ありきたりで平凡な明け暮れの中にこそ、神の恵みの導きと支えが大きく働いていたのだ。月並みな生活こそが本物なのだ。人との関わりにもまれ傷つきながらも、喜怒哀楽を互いに分かち合い、角を付き合わせて生きる私たち。その意味では2m離れた対話も、ツバやくしゃみの届かない議論などは在り得ない。未知なる者・物・処との出会いを求めて旅行し、顔も身体も寄せ合って親しい人は食事し喜んで酒を酌み交わす。この痛ましい災禍の中にも、神の救いの御業は何の遅れも滞りもなく行われているのではないか。

この世界大の混迷の中にも神の聖なるメッセージが託されているのではないか。来る日も来る日も病魔と身を挺して戦う人々、重症者にも親身に寄り添う無数・無名の医者や看護師たち、また患者を最期まで看取り励まし自ら感染して犠牲になる親族やイタリヤの神父たち。

我独り、ただ恐れて逃げ隠れるだけでは足りない。今ここで、私と為る回心の恵みを大いに祈り求めよう。この未曾有の閉塞状況の中で、私に出来ることは何か無いのか。主よ、私の心・身体・手足・耳目口をお使ください。勇ましく喜んで、主なる神の聖なる御旨を行うことが出来ますように。



中村健三 合掌

園 芸 便 り

どのような事が起こっても季節は巡り四旬節、聖週間そしてご復活祭を迎える事が出来ました。ミサに与れなくなり長い時間が過ぎたように感じます。皆様、どのようにお過ごしでしょうか？

教会のお庭では春を告げる草花が次々に開花し、4月に入り、気温の低い日が続いたおかげで桜の花は例年以上に人々に優しさを伝え続けていました。入園式、入学式が行われた後、桜の木を背景に記念撮影に訪れて下さる方々を目にした園芸オバサン達は、この子供達の未来が平

和でありますようエールを送りました。

そして、葉桜、新緑の季節になりました。お手入れを手伝って頂いた皆様のおかげで植物たちは勢い付いてきました。西面フェンスに這わしたモッコウバラ、信徒会館南側のカラタネオガタマは芳香を放ち、バックヤードではジャーマンアイリスが華やかに開花しています。

皆様と変ることなく元気に再会できることをお祈りしています。

施設管理部園芸係 貴島せい子



コロナよ退散してくれえッ

教会から下りたところ、阪急六甲駅前のカフェの看板です。四月に新規開店したばかり。主よ、いま私たちの前に立ちほだかる新型コロナウイルスの災いが、一日も早く終息し平和で健康的な日常が取り戻せますように。



教会受付の新しいスタッフ

大鶴純子さん ご挨拶

ミサのない異常事態最中の4月より、阪田さんの後任として教会事務室で働かせていただくことになりました。

初めてのことに戸惑うことばかりですが、皆さまに助けをいただきながら成長していけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

六 甲 カ ト リ ッ ク 教 会	
原稿は毎月15日ごろまでに教会受付へ直接ご持参いただくか、FAX やメールでお願いいたします。皆様からの原稿をおまちしております。 (広報部) http://www.rokko-catholic.jp	〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21 電 話 078-851-2846 F A X 078-851-9023 Email Address renraku@rokko-catholic.jp 編 集 広 報 部 発行責任者 アルフレド・セゴビア